自分にしかできない医療を

宮古・田老出身の山本医師（東京）

応援診療で郷里入り 被災者の心も癒やす

宮古市田老字荒谷出身で中野共立病院（東京都中野区）の副院長・山本英司医師（48）＝外科＝が、地元の避難所で応援診療し、初期医療に貢献した。田老地区は東日本大震災による津波で壊滅的な被害を受けた上、山本医師の実家はその後の火災で全焼、父母と同居していた親戚の行方が分かっていない。「地元を知る自分でなければできない医療がある」といい、被災者の病や心の疲れと向き合う。

山本医師は田老一中、盛岡三高を経て東京医科大卒業後、東京都内で病院勤務。震災が発生した11日、テレビで被害の大きさを知り、その日の夜に車で自宅を出た。高速道は規制され、27時間かけて盛岡に到着。宮城での応援診療の要請もあったが「地元に行きたい」と断った。

「津波防災の町」として知られる田老地区は大規模な堤防が整備されていただけに「被害はそれほどでもないだろう」と信じる気持ちもあった。14日朝、やっとたどり着いた地元は予想に反して一面がれきの山。「間違いではないか。こんなはずではない」と言葉を失った。

比較的高台にある実家は津波で浸水、その後に発生した火災で全焼した。両親は無事だったが、同居していた叔父栄蔵さんの行方が分かっていない。

安否確認にも十分に時間を割かず、田老診療所長の黒田仁医師らと協力して避難所での診察を行った。長期間休むことになった職場には「管理職として駄目だろうけど、メールで一方的に10日休みたいと伝えた」。

避難所生活を続ける地元住民たちは、思いのほか暗くない。「同じつらい思いをして、助け合う知り合いが一緒にいるからだろう。コミュニティーができている」と語る。被災1週間ほどで睡眠薬の処方が減った。

息子が山本医師と同級生の熊谷トミエさん（73）は「知っている人だからこそ心を許せる部分がある。英司君が来てくれてほっとした」と感謝する。

山本医師の父松蔵さん（85）、母セツさん（84）も避難所暮らし。松蔵さんは「（今回駆け付けたのは）小さいころ地域の皆さんにお世話になったからだろう」と話し、セツさんは「皆さんの役に立ててよかった。親孝行してもらった」と目を潤ませた。

「災害現場では初期医療が重要。自分が来て勇気づけられればと思った」と語る山本英司医師。地元出身の医師に被災者の心も和らぐ＝宮古市田老・グリーンピア三陸みやこ